福西電機 パーパス策定

JECA FAIR 2023出展ブース

「人・技術・情報の架け橋となり、最適解で『福』あふれる未来をつくる。」

福西電機(堀久志社長・大阪市北区)は昨年、「人・技術・情報の架け橋となり、最適解で『福』あふれる未来をつくる。」とのパーパスを策定した。今回は、パーパス策定に至った背景やパーパスに込められた思いなどについて迫る。

電材業界にはなじみの薄い「パーパス(Purpose)」という言葉は、一般に「目的」や「意図」と訳される。最近では、経営戦略やブランディングのキーワードとして用いられることが多く、その場合は企業や組織、個人が何のために存在するのかという「存在意義」のことを意味する。また、突きつめれば、ステークホルダーへの「提供価値」である。

創業70周年「Technical Jam 2016」(2016年11月)

可能性広がる良きパートナーに

福西電機は20数年前、「The First Choice Company」とのビジョンを掲げた。文字通り、ユーザーから最初に選ばれる会社を目指そうというものだったが、この20数年で社会的背景や考え方も変わるなかで、社内からもビジョンへの違和感を訴える声があがっていた。

堀社長は、一昨年の就任後ただちに「2030ビジョン策定プロジェクト」を結成し、2030年に向けてどこを目指すか検討を開始。「どう変わるべきか」「存在意義とは」について議論を交わすなかで、まずは明文化すなわちパーパスが必要だという結論に至り、「パーパス策定プロジェクト」を立ち上げた。

パーパス策定プロジェクトでは、「社会情勢や働き方が今後さらに変化するなかでユーザーだけではなく従業員や仕入れ先、社会からも必要とされ、愛される会社でないと生き残れない」との観点から、全6回のワークショップ等を通じて長きにわたり存在するために何が必要かを徹底的に議論した。堀社長は、プロジェクトでの議論について「若手社員が真剣に会社の将来を考えてくれていることがわかった。この経験はわれわれ経営幹部にとっても非常に勉強になった」と振り返る。

堀社長は、パーパスにある「最適解」を重要なキーワードにあげる。「ユーザーの皆様が何を求めているのかをしっかりヒアリングし、福西電機だからこそ提供できる最適解を考えてほしいと思っている。これからは価格だけで競争するのではなく、『こうすればビジネスにプラスの価値が出る、こんな方向にも転換できる』という土俵で勝負しなくてはならない。福西電機と一緒に仕事をすると可能性が広がる、一歩踏み込むことができる、そう思われる良きパートナーとして選ばれることが重要だ」と訴える。

また、パナソニック在籍時から福西電機とのビジネスに携わってきた経験を踏まえ、「会社の雰囲気や体質を変えるのが私の仕事。社員一人ひとりがそれぞれの持ち場で力を発揮できるような会社にするとともに、パーパスを実現できる体制づくりに取組みたい」との意気込みを示す。

福西電機ではパーパスに加え、パナソニックの活動に呼応して今年からDEI(Diversity Equity Inclusion)の取組みを開始した。DEIとは、企業において社員それぞれが持つ多様な個性を最大限に活かすことでより高い価値創出につながるという考え方を指す。

Diversity(多様性):挑戦する一人ひとりの個性を互いに受け入れ、尊重し、個性に価値を見つける

Equity(公平性):挑戦する一人ひとりに対する機会の提供の公平性を追求する

Inclusion(包括性):挑戦する一人ひとりが個性を発揮し、組織として活かしあう

福西電機ではDEIについて「北極星に値するパーパスを掴み取ることに挑戦する『D:誰もがみんな』『E:遠慮は無しで公平に』『I:イキイキ働ける』」と表現し、多様な人材がそれぞれの力を最大限発揮できるもっとも働きがいのある会社を目指す。

福西電機は2026年の創業80周年に向けて、パーパスとDEIを軸に飛躍を期す。